

今を生きる

埼玉学習センター

今野 啓次

希望に生きる人、絶望の淵に沈む人。人の命は明日をも知れない。しかし人は、自分らしい未来への夢や希望をもって初めて生き生きと今を生き抜くことができる。

今、私はあの有名な喜劇王チャップリンの映画「ライムライト」の一場面を思い返す。

かつて一世を風靡した喜劇役者カルベロは、今は老境にあり、今でも舞台に立っているが、昔の面影は消え、人気は衰え、暗く落ち込んでいる。そんなある日彼は物語のヒロイン・テリーに出会う。テリーは、プリマを目指し練習に励んでいた有望なバレリーナであったが、今は、全く自信を失い生きる希望も失っていた。そして自室でガス自殺を図ったが、それを寸前のところで救ったのが同じアパートに住むカルベロであった。それ以来、カルベロは、テリーの再起を心から願い、実の親以上にまた恋人のように彼女に寄り添い必死で彼女を励まし続ける。カルベロはテリーに向かって叫ぶ。

「いのち、いのち、いのちだ。樹木を育て宇宙を動かす壮大ないのちの力だ。その偉大な力が君自身の内に秘められているんだ。」

そんなカルベロの必死の励ましのおかげでテリーは以前の元気を取り戻して再起し、見事プリマの地位を獲得する。その舞台はどこでも大成功を収め、一躍世界の注目を浴びるようになった。

そして、今度は逆にテリーが落ち込んでいるカルベロを励まし続け復活への糸口をつける。しかし、間もなくカルベロの身体に突然異変が起きる。心筋梗塞が彼を捕らえたのだ。そして彼はテリーの舞台の袖で静かにまぶたを閉じ、呼吸を止めた。スポットライトを浴びながら優雅に舞い続けるテリーの姿を網膜に焼付けながら。そう、時は彼を引き止めなかった。だが彼は最高の幸福者だったと言えるだろう。彼が心底望んでいたように。

さて、私は既に 64 歳。孫も二人いて「じいちゃん」と呼ばれる。既に老境に達しているのだ。しかし、若い時は勿論、つい数年前まで自分にも「死」があるとはほとんど考えていなかった。だが数年前のある出来事から「死は自分のすぐ隣にあるかも知れない」と感じ始めた。その出来事とは、ある夜終電で帰宅した最寄駅で電車を降りてすぐ、目の前が暗くなり意識を失ってそのままホームに倒れ込んでしまったのである。幸い駅員さんが気づき 15 分ほどで私を起こしてくれ、私は、特に問題なく再び立ち上がり家まで歩いて帰った。その後の検査でも異常は見つからなかったが、それ以来「死」を意識し始めたのである。それが 60 歳定年を迎える 2 年前のことだった。その事をきっかけに自分は、60 歳で会社を辞めて子供たちに勉強を教えることを人生の総仕上げの仕事にしようと考え始めた。そして今、自宅で個人塾を立ち上げるべく準備をしている。

未来の可能性に溢れる若い人達の力になりたい。彼らの知力の開発を助けたい。それが私の夢だ。未来を信じる力だ。その為にまだまだ未熟な自分の知識、知恵を磨きたい。それが私が放送大学で学ぶ最大の目的だ。私は、夢を見る。夢の中で老いぼれ朽ち果てていく私の生命と若芽のように生き生きと萌え伸び行く若者の生命がオーバーラップする。その時私の魂は安らぎを覚え、私は確かな未来を信じて安らかに自分の人生に終わりを告げることができる。

2011年3月11日、1000年に一度の大津波が東北を襲った。何万という命が一瞬のうちに失われた。我々が失ったものは、あまりにも大きかった。しかし、得たものもある。そして、これから得なければならないものも見えてきた。2020年に東京で再びオリンピックが開かれることとなった。開催決定に至る原動力のひとつがこの大震災であったことは間違いない。また、これには震災からの復興の意味もある。

人の寿命は誰にも解らない。私も、いつどうなるか解らない。しかし、今日を！「今」を精一杯生きる。ぼけかけた頭をたたきたたき放送大学で勉強する。より良い未来社会を夢見て、戦争のない世界を夢見て。子供たち、孫たちに残せるものは何かと。そして明日を信じて。たとえ自分の命が明日終わるにしても。

かのアルキメデスは、戦場となった祖国の地で死の瞬間まで地面に図形を描いて思考に耽っていたという。人間の探究心、真理を求めてやまない心こそ未来を切り開く力となる。人類の知の膨大な遺産を大切に、それを土台に永遠の知にたどり着く。そんな見果てぬ夢を追い続ける若者をどれだけ育てあげられるか。私の老いの闘いは、今始まったばかりだ。